

松岡克尚『ソーシャルワークにおけるネットワーク概念とネットワーク・アプローチ』関西学院大学出版会、2016年。

はじめに（序論）

戦後社会福祉制度の変遷

→制度のパラダイム転換（古川）

①第一＝1980年代＝在宅福祉サービスを追加、統合化＝1990年福祉八法改正

②第二＝1990年代＝利用者との対等な関係、多様な供給主体＝社会福祉基礎構造改革

→「連携指向」「つながり活用の重視」。「利用者との間の『線的な対応』から、関係機関、関係者とのつながりを意識した『面的な対応』『網目的な対応』へのシフトチェンジがなされるようになった」（4）

「ネットワーク」の重要性

→「ソーシャルワークの文献では1980年代の半ばから」（大橋1993：5）（9）。

→ネットワークや「多分野の専門職と建設的な関係を築いていく能力」の必要性に関する英国の動き。

→（ネットワークは）第二のパラダイム転換以降の日本の社会福祉が目指す方向（多様な供給主体から成るサービス供給システムの下での利用者の自立支援）の実現に向けてソーシャルワークの再構築に活用していけないのではないか（11）

本書の目的

第一 ネットワーク概念の整理とソーシャルワーク理論への位置づけ

→ネットワークの理解は多義的・多様で「あるべき姿」のイメージが投射されており、「確定的、一致した見解が得られているとはいえない部分も大きい」。「ソーシャルワークにおける多岐多様なネットワーク概念を整理し、それらをソーシャルワーク理論のなかに位置付け、新たな実践戦略に反映させていく作業を行うことが急務」（13）

第二 ネットワーク用いたソーシャルワークの介入戦略を構築

→「車の両輪」に喩えられてきた直接援助技術におけるネットワーク（システム・アプローチ、エコロジカル・アプローチ、ソーシャルサポート・ネットワーク・アプローチ）と間接援助技術におけるネットワーク（チームワーク、多職種間連携（IPW: Interprofessional work）は「いずれかのレベルのみに限定して取り上げ、それらをさまざまに論じたとしてもそれではあまり意味があるものとは思えない。なぜなら、後者が取り扱っている諸問

題が十分に確立されることが、前者の内容を円滑に遂行していくための条件になると考えられるからである。両者は明らかに相互依存の関係にあると考えられる」(14)

→「ソーシャルワークの統合化という方法論的課題の文脈」をふまえ「ソーシャルワークにおけるネットワークを念頭に置いた介入戦略を構築」(15)する。これまでの「介入モデルと実際の介入戦略スキルとの間には、両者を隔絶させるような溝があるように思えてならない。すなわち、介入のための理論や理念は多く紹介されつつも、それらを具体化する術が乏しかったのではないだろうか」(15-16)。「『ネットワーク性』を追求する(目標)一方で、具体的なその実現方法がともなっていない状況である」(16)

#### ディスカッション

インプリケーション(自分の研究や実践に役立つと思ったこと)

- ・古川のパラダイム転換論に基づき、ネットワークを研究課題とすることの意義を示したことは説得的である。
- ・ネットワーク概念の検討から直接援助技術と間接援助技術を統合的に再構築しようとしている。
- ・「理論や理念は多く紹介されつつも、それらを具体化する術が乏しかったのではないだろうか」という指摘は、ネットワーク概念に限らず重要である。
- ・「ソーシャルワークにおけるネットワークを念頭に置いた介入戦略を構築」(15)がどのように展開されるか、この先を読むのが楽しみ。

#### 課題及び疑問点

- ・特になし